

持続可能な社会のための情報誌

マイECCO

Vol.
35

2013
OCTOBER
NOVEMBER

INTERVIEW

被災地の動物たちの
命を見つめて

作家

森 絵都さん

REPORT

韓国でアジア学生交流
環境フォーラム開催

CONSUMER

環境や社会貢献の分野にも
「クラウドファンディング」

FOOD

高齢者や市民が憩う
コミュニティ・レストラン
青森・浅虫温泉の「浅めし食堂」

MOTTAINAI

時計の下取り、販売で
寄付活動

CSR

小中学校などで「命の授業」
カシオ計算機

take free



東日本大震災から2年半。被災地では生活再建や復興のための活動が続いていますが、作家の森絵都さんは、原発事故で被災した福島県で、動物たちを保護するボランティアの女性たちと同行し、そこで見た現実を著書や講演を通じてレポートしてきました。原発から20km圏内に残された動物と、そうせざるを得なかった飼い主たち。「その悲しみ、苦しみを私たちはどこまで想像できるでしょうか」と問いかけます。【聞き手・明珍美紀、写真も】



「これからも動物たちの命について考えていきたい」と話す森絵都さん

作家 森絵都さん

被災地に残された命の問題を 考えていきたい

神的に消耗していく。続けられ続けるほど責任の重さが増していく状況にあります。私は伝える立場なので一線を引いていますが、犬や猫を見かけたらえさをあげるなど手伝っていました。あるとき、やせた犬が近づいてきて、甘え、はしゃ

ぎ回る。私たちに何かを伝えたかったのでしょうか。動物たちには何が起きたのか分からないままなのです。

— 飼い主は。
置き去りにせざるを得なかった被災者とお会いしたとき、大きな心の傷になっていると感じました。自分たちは慣れない避難所や仮設住宅で暮らし、それだけでもストレスになっているのに、ペットを置き去りにしたことが重くのしかかっている。2〜3日、避難してまた戻ってこようと思つて、そのまま戻って来られなかった人もいます。

— そうした現実をつづつたのが「おいで、一緒に行こう」(文芸春秋)ですね。
自分が見たことや何が起きたのかをありのままに書くかと思いましたが、ボランテアの人たちは、当時、警戒区域と呼ばれていた20km圏内に入り込んで活動していました。私が書くことで活動の妨げになったり世間の非難を浴びたりする可能性があります。結果的にはそれほど支障はありませんでした。

震災前から動物の問題に関心をもち、毎日新聞の連載「君と一緒に生

きよう」(07年から1年間、隔週)では、人間の都合で捨てられた動物と、それらの動物を保護する人々に視点を当てていました。
いま飼っている犬を里親から譲り受けたとき、動物愛護センターや保健所などから犬や猫を保護して里親募集をするこ

とで、多くの命が救われていることを知り、興味を持ちました。その後、保護主のところに行かなくては、とても人なつっこい犬がいて、取材中、ひざに乗って

くる。「里親を募集していますよ」と言われ、その日の夜には申し込んでいました。2匹の犬の里親になりました。

— これから必要なことは。
せめて次に同じような災害が起きたとき、悲劇を繰り返さないよう備えるべきところは備える。行政だけに頼るのは限界があるので、「どんなことになってもペットは手放さない」という覚悟のうえで、自分や動物の命を守ることが大切だ

と思います。
— ご自身はどういう備えを。
家の中でも首輪に迷子札をつけています。そうすれば、大地震が起きて犬たちが迷子になったとき、助かる確率が増えますよね。動物の保護も、一部のボランテアだけに頼るのではなく、みんなが力を出し合い、少しずつ負担を背負って

いく。そういう社会になればいい。
それは何かの被害に遭った人、困っている人についてもあてはまりますね。

原発事故が起きた福島県で動物を保護する女性たちと同行

— 福島にはいつから通っているのですか。

震災から2カ月を経た(2011年)5月下旬から。最近では今年3月に行きました。同行をお願いした「ねこさま王国」のメンバーが福島県の南相馬市で活動を続けていて、私も最後まで見届けるつもりです。みなさん、体力的にも経済的にもぎりぎり、いつまで続けられるか分からない、などと言いつつ日々奮闘しています。

— 「ねこさま王国」は福井県の市民団体ですね。

そうです。震災や原発事故後、動物たちがどうなっているのかを知りたくて、インターネットで調べているうちに、ブログで(「ねこさま王国」代表の)中山ありこさんたちのことを知りました。

— ともともと地元で捨て猫や子猫の保護、里親探しをしていたのですが、やはり震災が起きて、「とにかくできることをしよう」と福島に行き、たくさん動物が取り残された現実を見てしまった。中山さんは私と同じ年。動物たちのためだけではなく犬や猫を失った飼い主のために力を尽くしている。本人は「母性」と言っていますが、人間愛のようなものを感じました。

けれども時間がたつにつれてボランテア自身も、体力だけでなく経済的、精

想像力の問題だと思えます。こうしたことに心を痛めている人は、遠い国の紛争のことにも思いを馳せている。

自然や生き物たちのことに想像力を傾ける余裕

— 子どもたちに伝えたいことは。
原発事故が起きて、子どもたちに大きな負の遺産を残した気持ちがあります。ペットのレスキューもそうですが、危機に対して自分の頭で考え、判断する力を付けてほしい。そして自分以外のこと、自然や生き物の命にも想像力を傾ける余裕を持つて生きていってもらえたらうれしいですね。



福島でのレスキュー活動に同行し、犬を保護する森絵都さん(田中茂さん撮影) (文芸春秋刊「おいで、一緒に行こう」より)

一部のボランテアだけに頼るのではなく、みんなが力を出し合い、少しずつ負担をしていく社会に



「動物と放射能」をテーマに開かれた集会(日本ペンクラブなど主催)で「動物の命に対する責任をみんなの問題に」と訴える森さん(右から2人目) = 6月29日、東京の専修大学で

国境を越えて環境問題を考えよう

アジア学生交流環境フォーラム 韓国で開催

これからの社会をリードする「環境人材」の育成を目的にした「アジア学生交流環境フォーラム」（主催・イオン環境財団）が8月2～8日、韓国で開かれました。早稲田をはじめ、中国の清華大、韓国の高麗大、ベトナム国家大学ハノイ校の4大学に通う計約80人が参加。済州島にあるユネスコの世界自然遺産の火山や、沿岸部で進められる干潟や開発事業の見学など、学生たちはフィールドワークを通じて、環境と人との関わりについて考えました。

【明珍美紀 写真も】

report



韓国の食事も異文化体験の一つ



ビジターセンターの敷地に設置された太陽光パネル。センターの電気の一部を賄う



トレッキングの後に行われた済州大学の金文洪さん(右)の講義

世界自然遺産のユネスコを訪れ、トレッキングコースの「探訪路」を歩く学生ら

世界自然遺産登録で入山規制

「みなさん、ここは食べ物の持ち込みが禁止され、飲み物は水だけ。登山用のスティックや傘は持って入れないので、雨が降ったらかっぱを着てください」

最南端の済州島。世界自然遺産の拒文岳の溶岩道の入口で、ガイドの女性が注意を呼びかけます。学生たちは、広葉樹や針葉樹が混じった神秘的な「探訪路」をゆっくりと登っていきます。

30分ほどで頂上の広場に着きました。頂上といっても高さは456m。ユネスコは、島の火山活動で生まれた寄生火山の一つで、「溶岩が流出した後にさまざまな樹木や植物が生い茂り、特有の地形が生まれた」と、済州大学名誉教授の金文洪さん(67)が解説します。

韓国最高峰の漢拏山(1950m)の自然保護区域とユネスコの溶岩洞窟系、水中火山の噴火によってできた城山日出峰の3つの地域が2007年、「済州火山島と溶岩洞窟」として韓国初の世界自然遺産に登録されました。

そこで浮上したのが景観保護の問題です。とりわけ生態系の宝庫であるユネスコは、観光客の増加による環境破壊が懸念

自分なりにこの干拓事業を検証してみた」と複雑な表情を見せます。

トータルな視点で人と自然の関係を見つめよう

フォーラムは昨夏、日中韓3カ国の学生たちが集い、日本で初開催されました。領土問題で日中、日韓の関係は緊張していましたが、水田稲作や仏教の伝来など文化や風土の共有も認識したうえで「環境とは何か」という課題にアプローチしました。

その経験を踏まえ今回は、環境マネジメントという要素が加わりました。「文化だけではなく開発や経済などトータルな視点で人と自然の関係を見つめていくのが一つの狙い」と早稲田大学留学センター教授の高野孝子さんは説明します。

都市に水辺の空間が復活

終盤は首都の街を歩きました。中心部を流れる川の両側で家族連れや若者たちが水遊びを楽しんでいます。05年に復元された清溪川路です。

朝鮮戦争(50～53年)で疲弊した韓国人々は、豊かな水をたたえる旧清溪川の周囲に集まり、「庶民の活気にあふれていた」といいます。朴正熙大統領(当時)が政権を握ると、経済成長率は上がったものの労働問題が深刻化。そうした時代を背景に、生活排水による川の汚染などが進み、70年代に高架道路がかげら

日本、中国、韓国、ベトナムの大学の若者たちが集い

されました。そのため、1日3000人の入山規制を設けて入山料を徴収することになりました。また、地元住民に呼びかけてボランティアガイドを養成。いまでは約30人のガイドが活躍しています。「環境保全のためには、ある程度の管理が必要。地域の協力を得て、みんなで自然を守る気持ちを広めていくことが大切だ」と金さんは強調します。

干潟の干拓現場を見学

済州島を後にした一行は飛行機で光州へ。そこからバスで、全羅北道の沿岸部に広がる「セマングム」の干拓現場に向かいました。

「うわあ、長い防潮堤」。学生たちから驚きの声が上がります。

かつて豊かな干潟が広がっていたセマングム。干拓事業は「韓国最大の国家事業」として1980年代半ばに計画が具体化しました。「開発が環境保全か」で地元は揺れ、日本でもその行方が注目されましたが、33年に及ぶ防潮堤で約4万畝の干潟と海を閉め切る工事が7年前に完了しました。干拓地の内部は、農業や産業、観光用地などに整備される予定。海岸沿いでは防風林などの目的で、「海の松」と呼ばれる松の一種を植える事業が進んでいます。

地元のNGO(非政府組織)のメンバーの意見を聞きました。「市民生熊調査団」の呉東弼さん(38)は「セマングムの干潟は、海を渡る鳥たちの重要な休憩地だった。埋め立てによって水質悪化などの問題が生じ、生態系への影響が出る」と指摘し、干潟の復元を訴えました。早稲田大の縄田祥一さん(22)は「本当にこの開発が必要だったかどうか、

干拓事業が進むセマングムの海岸

観光名所になっている清溪川路

ソウルの繁華街で市民にアンケートをする学生たち

「エコフレンドリーな生活様式に」 「次の世代によりよい環境を手渡す」 持続可能な未来に向け、若者たちが主張

昼間はフィールドワーク、夜は10のグループに分かれてディスカッションを重ねました。「経済と環境の関係は」「生活の質とは」といった難題に向き合い、解決のために何ができるかを話し合っていました。

最終日はソウルの高麗大での成果発表です。大気汚染や二酸化炭素(CO₂)の排出など、各国とも環境問題を抱えています。日本では東京電力の原発事故が発生して福島の人々が苦難を強いられ、初参加のベトナムは、ベトナム戦争で米軍が使用した枯れ葉剤により、文字通り、戦争によって環境が破壊された歴史があります。

最初に登場したグループは「私たちが出した結論は、人間の過度な関与は生態系を破壊するということ。持続可能な社会をつくるには、人間の関与を最小限にすべきだ」と主張しました。

そのほか「済州島の世界遺産は環境が保たれているが、観光産業で島の自然が破壊されている部分がある。キーワードは共存。自然がなければ人間も生きられない」▽「私たちがエコフレンドリーな生活様式に変えることが必要。そのためには教育が大切」——などの発言がありました。

寸劇を披露したグループは「何のために自然を守るのか。それは次の世代によりよい環境を手渡すため。人間の心と社会、経済。この3つの価値を理解する必要がある」と訴えました。

最後にイオン環境財団の岡田卓也理事

グループディスカッションの様子



長(88)からグループごとに修了証が授与され、1週間の日程が終わりまりました。ベトナムのファン・チャン・ハンリンさん(19)は「日中韓それぞれの国の友だちができ、環境という共通のテーマについて話し合うことができてよかった」と声を弾ませます。清華大の張詩花さん(19)は「環境問題は一つの国で解決できない。それぞれの国の関係をよくして協力することが大切であり、それには人々の交流が大切だと感じた」と言います。昨年、今年とフォーラムに同行した高麗大環境生態工学部教授の孫堯丸さん(52)は「人と環境に関わるさまざまな場面を見てもらおうとプログラムを組んだ。国家間には外交や政治問題があるが、それを乗り越えて環境について自分たちが何ができるかを考えてもらいたい」と話していました。



4カ国の大学に通う学生とフォーラムを準備した人々

修了証を渡す岡田卓也理事長(左から4人目)

「フォーラムで若者同士が交流を」 イオン環境財団・岡田卓也理事長

アジア学生交流環境フォーラム(英語名はAsian Students Environment Platform)。

イオン環境財団の岡田卓也理事長が母校である早稲田大や、文化活動などで親交のある清華大、高麗大に呼びかけ、日中韓の3大学の学生らが参加して昨夏からスタート。1回目は日本が舞台で、東日本震災の被災地の岩手県田野畑村や世界遺産の中尊寺、京都などを巡り、「環境とは何か」を考察しました。今夏はベトナム国家大学ハノイ校の学生が加わりました。岡田理事長は「21世紀は環境の時代。アジアの環境問題を解決するのは、若者同士の交流が大切」と言い、「このフォーラムから環境政策のリーダーが育ってほしい」と期待します。

※フォーラムは毎日新聞社のほか中国青年報社、朝鮮日報社、トイチェ社などが後援しました。



クラウドファンディングで「思い」を実現

「クラウドファンディング」(CF)をご存知でしょうか。インターネットを活用した資金集めの手段です。ここ数年、欧米で広がり、日本にも上陸。環境や社会貢献の分野で、それぞれの思いを実現しようとする人たちが、クラウドファンディングを活用する動きが目立ってきました。

【明珍美紀、写真も】



メンバーらが利用するワーキングスペース。仕事で使用する電気をソーラーで賄うなど自家発電システムの導入を計画



築約40年のみどり荘。自然エネルギーの導入と「電力見える化」のプロジェクトが進められている

東京・目黒の住宅街に、ツタにおおわれた「みどり荘」と呼ばれる建物があります。昨年、開設された coworking space。デザイナーや編集者、クリエイターら約40人のメンバーが、室内の空間を共有しながら、自由に働く場となっています。ここで進んでいるのが「ソーラーデスク開発&電力見える化プロジェクト」。パソコンや携帯電話など、仕事で使う電気は太陽光エネルギーで賄い、電力会社から電力供給を受けない自家発電システムを導入しようという計画で、資金集めにクラウドファンディングを利用しました。

1階はオーナーの住居でワークスペースは2、3階(計274平方メートル)。築約40年のマンションをリノベーションした建物なので電気容量(各階60瓦)が不足気味でした。

「工事をして容量を大きくするより、それぞれ電気の使い方を見直し、足りない分は自然エネルギーを取り入れることにしました。導入のプロセスやメンバーの電力使用量なども公開します」。みどり荘を運営するシンクタンク「未来インスティテュート」マネージング・ディレクターの小柴美保さん(31)はこう説明し、企画に協力する編集者の清田直博さん(35)は「みどり荘のようなシェアオフィスや小規模事業所がソーラーシステムを導入するためのモデルケースをつくりたい」と強調します。

目標額は65万円。募集期間は8月7日から2カ月間と決め、出資してくれた人にはサービスや特典を設けました。例えば金額が1000円だと、ソーラー発電で充電した電池などをプレゼント。1万円の場合はみどり荘の1日利用権などのチケットが付きます。

被災者保護活動などが実現

クラウドファンディングを始めるには、事業を立案する人と、資金提供者をつなぐプラットフォームのサイトを利用するのが一般的です。

寄付型のほか、サービスや特典が付く購入型などがあり、寄付型では英国の「Just Giving」の日本版としてインターネット募金サイト「ジャスト・ギビング・ジャパン」が2010年3月に開設されました。一方、購入型で世界的に知られているのが09年にスタートした米国の「キックスターター」です。日本ではその2年後に「READYFOR?」(レディーフォー)、「CAMPFIRE」(キャンプファイヤー)、「Motion Gallery」(モーションギャラリー)などのプラットフォームが登場。今年に入って、「持続可能な社会を掲げた「サステナクラウドファンディング」や「シューティングスター」が相



カンボジア製のシルクストールの流通支援をする高橋邦之さん

インターネットを使って資金を集め 出資者へのリターンを通して心の交流も

フェアトレード(公正貿易)の事業でCFを利用するケースもあります。NPO法人「ポレポレ」代表の高橋邦之さん(40)は、カンボジアの工房で女性たちが紡ぐシルクストールの流通支援を今春から始めました。

「インターネットが媒体のクラウドファンディングは、思わぬ人に自分たちの思いが届く利点がある。企画段階で生活者に提案できることも特徴の一つ」とモ

ーションギャラリーを主宰する大高健志さん(30)は解説します。ただし、寄付や出資をする場合は内容をよく見極めることが必要です。「運営側も実行性に疑問がないかチェックしているが、利用が広がれば100%の安全が担保できるとは限らない。生活者の目が重要になる」

サステナクラウドファンディングを運営する環境広告会社「サステナ」代表のマエキタミヤコさんは、「積極的に情報発信することで、これまで資金的に難しかった取り組みを実現させる可能性が広がった」と言い、「出資者へのリターン(お返し)は心を込めて書いた手紙でもいい。そうした工夫を凝らすことで心の交流が生まれる」と話しています。



Motion Galleryを主宰する大高健志さん

クラウドファンディング(CF) クラウド(群衆)とファンド(資金)を組み合わせた造語で、インターネットを利用した資金調達の方法。少額のお金を多く人から集めることができ、1~2割がCFサイトの運営側の手数料になります。日本では欧米と同様に購入型が主流。決済はクレジットカードなどで、目標額に達すると口座から引き落とされる仕組み。達成できなくても、集まった資金をもとにプロジェクトを開始するCFもあります。

クラウドファンディングの仕組み



(Motion Gallery提供)

工房はクメールの伝統工芸品の継承や発展、女性の経済的な自立を目的に設立されました。製造工程やそこで働く人々のライフストーリーをまとめた冊子(1000部)の作成と、11月に来日する工房の代表者との交流イベントの費用をねん出するため、レディーフォーに申請。2カ月の募集期間で最終日の9月18日、目標額(200万円)に到達しました。「どうなることかと、はらはらどきどきしたサイトを見た人がフェイスブックなどで広げてくれ、共感の輪



JICA(国際協力機構)主催のNGO支援事業の説明会でクラウドファンディングの事例を紹介する「READYFOR?」代表の米良はるかさん。「社会性や公共性の高いプロジェクトが多いことが特徴」という11月9日、東京のJICA地球ひろばで

高齢者や市民を食でつなごう

青森市の東部にある浅虫温泉に「高齢者や地域の人の健康を食から支えよう」と、地元の開業医らが発案したコミュニティ・レストランがあります。その名も「浅めし食堂」。食材は直営の農園で育てた無農薬野菜などを使い、開店10年目の今春、新たな場所に移ってリニューアル。有機栽培のコーヒーや紅茶などカフェメニューも充実させ、八甲田の山のふもとに「オーガニックな空間」が生まれています。

【明珍美紀 写真も】

青森・浅虫温泉の「浅めし食堂」

温泉地にオーガニックな空間を創出

陽光に照らされた真っ赤なトマトやネギ、キュウリたち。まず向かったのは温泉街から車で10分ほどの場所にある「いきいき農園」です。周辺の農家にならい、温泉水で育てた自家製の「温泉トマト」はジュシーな味わい。「これからは、ダイコンやカブ、ゴボウなどの秋物になります。農薬を使わないので、この畑は雑草と共存ですね」と農場長の戸久世健さん(25)は言います。農家に生まれ育った戸久世さんですが、「僕のやり方はほとんど独学。初めに肥料をたくさん入れ、成長をよくする工夫をしています」。

大きな葉がひしめき合う一角は、ヤーコンの畑。イモを収穫する前に葉を摘み、乾燥させたものが、店で提供するヤーコン茶になります。

収穫された野菜は食堂の厨房に運ばれ、スタッフの女性たちが調理に取りかかります。ランチのメインは日替わり定食で、この日のメニューは「エビ玉」でした。具にはエビや長ネギのほか、タケノコも加え、ミニトマトで彩りを添えます。これに、ごはんと同量味噌汁、総菜1品が付きます。

定食の熱量は平均約600kcalで、塩分は3g以下。オリジナルのだしでうま



日替わりランチのエビ玉

みを出す工夫をしています。「時折、利用者に「味がうすい」と言われ、いかに私たちが濃い味に慣らされているかが分かります」と店長の三国垂希子さん(42)は話します。

浅めし食堂は、NPO法人「活き粋あさむし」が運営しています。学校週5日制に伴う子育て支援が活動の始まりでしたが、やはり地域の一番の課題は高齢化問題。「1日に1食でも高齢者が栄養バランスのとれた食事をすれば、元気で長生きができる」と、理事長を務める医師の石木基夫さん(56)は石木医院院長Ⅱらが呼びかけ、2003年10月、浅めし食堂が誕生。同医院のそばの閉店したスナックを改装し、三国さんら3人の主婦がスタッフとなってスタートしました。

献立の内容は、石木医師や栄養士が監

修。初めの頃は、カレーライスやオムライスなどの定番メニューに人気が集まり、野菜の副菜を添えて栄養のバランスを考えました。当初は週3日、平日昼だけの営業でしたが、それでは「食材がもったいない」と弁当の配達を始め、翌04年1月から週5日になりました。



石木医師(右)と店長の三国さん

三国さん自身、調理師免許を取得し、「じゃがいものすいとん」など郷土の味を生かしたメニューの開拓に取り組みしました。野菜づくりに力を入れ、農地を借りて「いきいき農園」を開設。また、地元の医療法人が運営する、サービス付き高齢者向け住宅「ストーンキ」が同医院の隣に建設されることになり、その1階に店を移転。今年3月、リニューアルオープンした食堂(約60席)はストーンキの入居者の食事(昼と夜)も手がけ、お年寄りや地域住民、外部の一般客が、共に食を楽しむ交流の場が生まれました。

東京慈恵会医科大学病院(東京)での勤務後、父の後を継ぐため帰郷した石木医師は「観光客の減少で、この地域もかつての賑わいがなくなっている。これからは温泉という資源と食を結びつけ、地域貢献のための新たな方向性を見出したい」と語ります。その拠点となるのが、浅めし食堂です。



- ①温泉の湯をかけて育てたミニトマトを収穫する戸久世健さん
- ②いきいき農園から運ばれた野菜
- ③ヤーコンの葉は乾燥させてお茶に
- ④調理するスタッフ
- ⑤「オープン当初から利用している」という阿部シゲさん(95)

医師らが発案 直営農園の無農薬野菜を使いヘルシーな定食を

浅めし食堂
青森市浅虫蛸谷65の34 (☎017-752-3322)。青い森鉄道浅虫温泉駅から徒歩約5分。営業時間は午前11時～午後5時で現在は土日営業。日替わり定食は600円。定食のごはんをもち小麦の塩むすびにすると800円。そのほかのアレンジも可能。

メニューを改革 「もち小麦」など新食材も

リニューアルオープンに伴い、浅めし食堂ではメニューの改革を試みました。高齢者が食べやすい新食材として「もち小麦」を取り入れました。日本で開発された小麦の品種で、青森県立保健大学などが研究を進めています。「一見すると玄米のようですが、もち米のようなモチモチ感とうどんのようなツルツル感がある独特の食感。粒はお米のように炊いて塩むすびにします」と三国さん。粉状のものは、すいとんやニョッキなどに用いられ、「定食のごはんの代わりに、もち小麦のおむすびを組み合わせることもできます。お客さんとの会話から、こうしたアレンジが生まれました」

さらに一部の食材に真空調理法を導入。「真空の袋に食材を入れ、スチームで長時間加熱します。うまみや栄養分が損なわれず、煮くずれがなくなる」といいます。カフェメニューではオーガニックのコーヒーや紅茶に加え、自家製のシソジュースやヤーコン茶などが登場。コンニャク粉入りのペーグルや、「温泉トマト」を使ったゼリーなどが加わりました。



もち小麦の塩むすび(左)とじゃがいものすいとん(右)=浅めし食堂提供

建物もエコ仕様

新築移転に当たっては、屋上に太陽光パネルを設置し、食堂のフロアなどパブリックスペースの暖房は温泉熱を利用。「夏は井戸水を循環させて建物の熱を取る輻射冷房で、身近な資源を活用した」と石木医師は説明します。



腕時計のセレクトショップ「チックタック」などを展開する株式会社ムーヴ・エイ（東京都渋谷区、浅野浩隆社長）では、MOTTAINAIキャンペーン※1と連携し、腕時計の下取りを年2回、実施しています。集まった不要な時計を寄付、フリーマーケットで販売し、その収益をケニアの植林活動や東日本大震災の義援金に充てるという仕組みです。取締役チックタック事業部長の松崎充広さん（50）にお話を聞きました。【浅田芳明】

腕時計の下取りを始めたきっかけは？
「そもそも洋服などで行われていた下取り企画は、お客様のタンス在庫を無くして新しい服を買っていただくのが狙いですよね。同じ趣旨で腕時計の下取りを考

えた時、単なる下取りではなく、普通の時計屋が考えないような面白い企画にしたいと、いろいろ考えました。集めた時計をどう処理すればよいのかも悩みどころでした」と振り返ります。

MOTTAINAIキャンペーンを知り、キャンペーン事務局とコラボした下取りのスキームを作り上げました。チックタックの店頭で、不要な腕時計1個と同店で使える2000円クーポン1枚を交換。同社では使える時計は電池などを交換してキャンペーン事務局に寄付します。事務局は定期的に開催している「MOTTAINAIフリーマーケット」で1

個500円から2000円で販売。収益金をケニアの植林活動「グリーンベルト運動」と東日本大震災の災害復興支援に充てています。なお、使えない時計は電池を取り外し、有害な物質が出ないよう素材ごとに安全に分別処理。電池は「一般社団法人 電池工業会」を通じ、資源活用できる素材と有害な素材に分けて適正に処理しています。

累計で4万8171点にも

こうして2009年6月、「もったいないウオッチエクステンジ」と命名した下取りキャンペーンが始まりました。当時、パルコを中心に全国で58店舗の展開でしたが、1カ月間に7527点もの時計が持ち込まれました。どんな腕時計でも受け付けたため、大きな反響を呼びました。以来、毎年6月と10月を下取り月間として継続。今年6月は、79店舗で7530点になりました。累計では、4万8171点に達しています。中には、「世の中に役立つのなら」と30万円相当の高級品を持参したお客さんもいたそうです。

松崎さんは「僕たちも、ですが、時計を持ち込むお客さまも社会貢献しているという意識があると思います。お客さまは満足感を得られるのではないのでしょうか。ただの下取りだったら、こんなに来てくださらないと思います。MOTTAINAIとタイアップして企画に付加価値がついたおかげです」と話していました。フリーマでの時計販売は、人気コーナー

Reduce(ごみ削減)、Reuse(再利用)、Recycle(再資源化)の3Rと、地球資源に対するRespect(尊敬の念)が込められた言葉「もったいない」を、環境を守る国際語「MOTTAINAI」とし、地球環境に負担をかけないライフスタイルを広め、持続可能な循環型社会の構築を目指す活動です。ワンガリ・マータイさんが提唱し、2005年にスタートしました。企業からの協賛や環境にやさしいオリジナル商品の販売、各種イベントなどを通じてキャンペーンを展開し、収益の一部をマータイさんが創設したケニアの植林活動「グリーンベルト運動」に寄付し支援しています。マータイさんは11年9月に亡くなりましたが、マータイさんの遺志を継いでキャンペーンは継続しています。

腕時計の「MOTTAINAI」企画 ケニアの植林、 東日本大震災の復興に寄与

としてすっかり定着しました。売上から販売スタッフの人件費を差し引いた寄付金の総額は、09年から12年までに136万3375円になりました。フリーマの関係者は「時計売り場は毎回、入場制限するほどです」と反響の大きさに驚いていました。

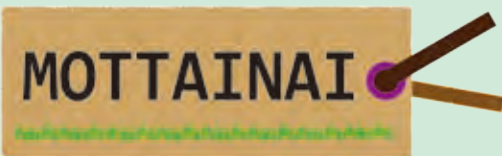
同社はMOTTAINAIキャンペーン以外にも、時計10個の売上ごとに苗木1本を植樹して国内の森林再生に寄与するキャンペーンや、新社会人が購入した

時計の売上の一部を震災孤児支援のプロジェクトに寄付するキャンペーンも展開しています。松崎さんは「キャンペーンを通してお客さまとのコミュニケーションを図ることができ、間接的に社会に貢献できる事がスタッフのやりがいにもつながります」と各種キャンペーンの効果を解説しています。
今回の腕時計下取り企画は10月1日（火）より10月31日（木）まで、全国のチックタック系列店で開催されます。



「時計のMOTTAINAI」の意義を語る
ムーヴ・エイ取締役の松崎充広さん

東京スカイツリー併設の商業施設「東京ソラマチ」にも出店しているチックタック
クリムーヴ・エイ提供



MOTTAINAI
ようこそ
MOTTAINAIへ。

MOTTAINAIコラム

初の省エネビデオ

インドネシアの高校生たちが「MOTTAINAI!」(もったいない)と歌って踊るシーンが入った同国初の省エネ啓発ビデオが完成し、8月にジャカルタでビデオを紹介するイベントが開かれました。

JICA(国際協力機構)の政策アドバイザー、矢野友三郎さんがプロデュースした9分の映像で、電気のスイッチをこまめに切るなど「節約の勧め」をアニメなどでわかりやすく解説。同国の人気歌手、アグネス・モニカさんが特別出演しています。

ユーチューブにもアップ済みです。(http://www.youtube.com/watch?v=uGvDh4RB-Cg)

「ビデオを通じてMOTTAINAI精神を若い世代に伝えていきたい」と矢野さん。キャンペーンの世界への広がりを実感しています。

【MOTTAINAIキャンペーン事務局長・七井辰男】

MOTTAINAIバッグ 出来ることから 始めましょう 20人にプレゼント



折りたたむとコンパクトになるエコバッグ

エコバッグのMOTTAINAI版「スーパーコンビニバッグ」が最近、売れ行きが好調といえます。製造・発売元の立巴物産(東京都千代田区)の矢野誠州社長は「一部の大手スーパーでレジ袋の有料化が拡大しています。それに伴い、改めてエコバッグが注目されているのかもしれない」とみえています。

「スーパーコンビニバッグ」の素材はポリエステルで、サイズがエム(4色)とエル(3色)の2種類あります。いずれも折りたたむとコンパクトになり、カラビナ付きでかばんなどに取り付けできます。「常に持っていてもらうのが大事だと考えました。急な買い物で飛び込んだコンビニなどで使ってもらえれば、レジ袋の削減になります。出来ることから始めましょう」と矢野社長は強調しています。エムは360円、エルは540円です。



エコバッグを手にする矢野社長

「スーパーコンビニバッグ」のエムを20人にプレゼントします。はがきに、郵便番号、住所、氏名、年齢、電話番号を明記し、〒102-0083 東京都千代田区麹町3-12-14立巴物産プレゼント係までご応募ください。10月31日必着。これらの商品は「MOTTAINAI Shop」のホームページ(http://mottainai-shop.jp/)で購入できます。

モッタイナイは世界中のアイコトバ。MOTTAINAIキャンペーンの関連情報が満載です
オフィシャルサイト

http://mottainai.info

カシオ計算機



「命の授業」の中で環境問題について話す若尾久さん=本人提供

広がる「命の授業」

「絆、命のリレー、心の成長」という 三つの学びが柱

時計や電卓、電子辞書などを製造販売するカシオ計算機（本社・東京都渋谷区）が進めているCSR（企業の社会的責任）活動の一つに「命の授業」があります。講師はCSR推進室の若尾久さん。小中学校などを訪問し、さまざまな事例を通して児童、生徒らに「命の大切さ」を伝えていきます。

プログラムは原則90分。内容は少しずつ異なりますが、「絆、命のリレー、心の成長」という三つの学びを柱にしています。例えば、聴診器で胸の鼓動を聞いてその感想を発表しあったり、がんを患

い14歳で亡くなった少女の生前のスピーチを朗読したり。また、学校に通えない開発途上国の子どもたちの暮らしを紹介し、貧しさと幸福について考えてもらうこともあります。

「精密機器の会社がなぜ」。初めのころは、よくこんな質問を受けたそうです。

「環境、人権、貧困など、さまざまな社会的課題の根幹には命の軽視がある。将来の社会のリーダーとなる青少年に命の大切さについて考えてもらいたい」という若尾さん自身の強い思いがあり、同社がそれを理解し、活動をサポートしました。

カシオという名前はあまり表に出さず、教育関係者の間では「若尾さんの命の授業」と言われるようになりました。

CSR推進室の木村則昭室長は「会社の事業に関係ないからこそ意義がある。社員が幅広く参加する形のCSR活動ではなく、若尾さんしかできないことだが、自分たちの会社は命の授業を行っている」と社員が誇りを持ってくれればと話します。

「命の授業」は全国に広がり、07年からこれまでに約250の学校・団体で約2万人が授業を受けました。

問い合わせは、カシオ計算機CSR推進室（☎03・53334・4901）の若尾さんへ。

【小野田正利】

毎日新聞 水と緑の地球環境本部 活動紹介

水と緑の地球環境本部は毎日新聞創刊135年を迎えた2007年に創設されました。それまでに実施してきた環境に関連する各種キャンペーンを総合的に展開し、地域と地球規模の環境保全に貢献することが設立の目的です。2000年に始めた「富士山再生キャンペーン」、05年から取り組んでいる「MOTTAINAI（もったいない）キャンペーン」、06年からの「My Mai Tree」の植樹活動に加え、09年からは森林保全にも活動の幅を広げた「つながる森プロジェクト」を開始しました。そのほか、日韓両国の環境活動に取り組む団体・個人を表彰する「日韓国際環境賞」などが活動の軸になっています。

また、企業の環境担当者や環境NPOの学習交流会「毎日Do! コラボ」の開催など、環境分野の方々の交流促進を図っています。11年の東日本大震災以降は、環境NPOなどと協力しながら、さまざまな被災地支援を続けています。

「マイECO」は08年に創刊したフリーペーパーです。隔月刊で、環境に関わる著名人らのインタビュー、環境活動のレポート、環境保全につながる暮らし方や食、MOTTAINAIキャンペーン情報などを紹介しながら、環境保全や私たちの生活のあり方について、読者のみなさんと共に考えます。



発行日：2013年9月30日
 編集・発行：毎日新聞社 水と緑の地球環境本部
 発行人：斗ヶ沢秀俊
 〒100-8051 東京都千代田区一ツ橋1の1の1
 ☎03・3212・2607 FAX03・5208・4946
 E-mail：myeco@mainichi.co.jp
 デザイン：中村千晶、山本幸枝

【表紙：白川郷の柿】岐阜県大野郡白川村荻町の合掌造り集落は、言わずと知れた世界遺産！ 1961年の秋、御母衣ダム完工式取材に訪れて以来、何回か荻町の風に吹かれた。今も懐かしさが募るばかり……。柿が熟せばもうすぐ雪だ。（撮影・中村太郎）

【中村太郎プロフィール】写真家。1940年東京生まれ、鎌倉在住。毎日新聞社写真部を経てフリー。主な写真集に『宮沢賢治 幻想紀行』『茂吉の山河』（共著・求龍堂）『ねむの木の子もたちととり子さん』（ねむの木学園）などがある。

編集後記

「2020年東京五輪」。9月8日早朝、ブエノスアイレスから届いたニュースが日本列島を駆けめぐりました。

7年後の開催に向け、東京には選手村や競技場など新たな施設が次々に建てられます。再生可能エネルギーへの転換や二酸化炭素の削減、街のバリアフリー化など、東京が「環境都市」にシフトできるかどうかの岐路に立っていると云えます。また、今年には関東大震災から90年。東京湾岸の液状化対策など防災や減災に力を入れることが必要です。

東日本大震災の被災地は復興にはほど遠く、東京電力福島第1原発事故により政府は1日300トンの汚染水が海に染み出ていると試算。「汚染水の影響は福島第1原発の港湾内0.3平方キロメートルで完全にブロックされている」。国際オリンピック委員会総会で首相が放った言葉を福島の人々はどのように受け止めたのでしょうか。今号のインタビューに登場した作家の森絵都さんは、置き去りにされた動物たちの命にも目を向けます。

平和の祭典である五輪と被災地の再生を結びつけることが、新たな課題です。（M）

「マイECO」は毎日新聞東京本社1階（東京メトロ東西線竹橋駅下車）の「MOTTAINAI STATION」などに置いてあります。また、「マイECO」を配布してもらえる市民グループや店舗、カフェなどを募集しています。詳しくは毎日新聞水と緑の地球環境本部（☎03・3212・2607）へお問い合わせください。



ホームページ ☎ <http://mainichi.jp/feature/ecology/>

毎日新聞社は日本の里山を保全・再生する活動を支援しています。マイECOの用紙の一部は日本の里山の保全と再生に役立てられます。